



全国よい仕事研究交流集会在3月2日 - 3日に駒澤大学にて開催される。初日は劇作家の平田オリザさんを招いて、古村労協連理事長が聞き手となり、徹子の部屋風のセットと音楽の中、記念企画を行う。平田さんは「一人ひとりが違って、みんな大変」であり、「対話を通して、Aという意見とBという違う意見があり、Cという新しい意見にたどり着くことが大事で、その行程を楽しめる日本人になっていくことが大事」と。大田堯先生のメッセージでも「一人ひとりみな違う、しかし人は一人では生きていけず、対話を基調とする協同労働に期待する」、パネルディスカッションで宮崎隆志先生は「一人ひとりの命がいきいきと躍動するのが協同労働」など協同労働がなぜ話し合いや合意形成を大事にしてきたのか、その価値を伝えてくれたように感じた。壇上にこたつを置いての座談会では、4人の組合員の入団時の不安や不信感から、協同の実践を通して協同労働が腑に落ちる瞬間や、悩みや辛さを率直に組合員に伝えるなかで受け止められ、一緒に乗り越えることで仲間を信じられるようになったなどの等身大の組合員の姿が語られた。会場で知らない参加者同士で話し合う場面もあり、多くの参加者が対話の大切さや、なかなか分かり合えない難しさや悩みが共有されたのではないか。2日目は20分散会に分かれ、37人のコメ

ンテーターの先生方が加わり、活発な実践交流がされた。組合員が率直に話し合い、協同労働への共感を地域に広げていくことの第一歩に繋がればと思う。

法制化では、協同組合振興研究議員連盟の篠原孝事務局長と同議連幹事長代理の榎屋敬悟議員が同席のもと、長野県にあるセンター事業団、労協ながの、長野県高齢者生活協同組合の現場視察及び意見交換を行った。労協ながので長年ひきこもっていた若者が仲間として受け入れられて働く姿や、就労支援の取り組みを見る中で、協同労働への理解がより深まる場面となった。

龍谷大学「福祉フォーラム」(3/24)や東都生協学習会(3/30)の講義など「協同労働」を伝える機会が増えている。多くの人たちから一人ひとりが主体となり、協同して働く協同労働という新しい働き方に高い関心が集まり、一人一票の考え方や合意形成の難しさ、非営利性や継続性などの質問をいただく。終了後には「具体的に引きこもりの親の会を立ち上げたい」「障がい者の親の想いを共有したい」「高齢者の活躍する居場所を作りたい」などの意見が寄せられる。

今国会で法制化をなんとしても実現するため、全国の仲間や応援していただいている方々と共に、議員・行政・地域で協同労働の実践や労働者協同組合法の必要性を訴える。